

聖書：ヨシュア記1章1～9節

説教題：主がともにおられる

## 1 ヨシュアの信仰

本年最初の主日礼拝に招かれていることに感謝したいと思います。新しい年を迎え、この春から就職する方もいます。新しい学校に進む方もいらっしゃると思います。どんなことでもそうですが、今まで経験したことのないところに歩いていくとき、だれでも不安を覚えます。

今日からしばらくヨシュア記を続けて見ていきます。これまでモーセは四十年間にわたりイスラエルの民を率いました。そのモーセが亡くなり、ヨシュアがイスラエルの新しいリーダーに立ちます。もちろんみずから進んでリーダーになったのではありません。2節を見るとわかるように、主がヨシュアをリーダーに選んでいます。確かに彼は、若いときからモーセの側近として働いてきましたから、それなりの訓練は受けています。しかしそれだけでリーダーに選ばれるわけありません。

主はヨシュアの信仰を見ております。そのことをよく現しているエピソードが民数記13、14章にありますので紹介します。モーセはカナンの地を目の前にして、12名で構成される偵察部隊をひそかに派遣しました。偵察を終えて帰ってきたとき12名のうち10名がこう報告します。「私たちはあの民のところに攻め上れない。あの民たちは私たちより強いから。」これを聞いて人々は動揺します。もうすぐ約束の国に入れると思っていた希望が砕かれ、大きな失望感に襲われてしま

うのです。エジプトに帰ろうと叫ぶ者さえ現れます。そんなときヨシュアがカレブと共に叫びました。「私たちが巡り歩いて探った地は、すばらしく良い地だった。もし、私たちが主の御心にかなえば、私たちをあの地に導き入れ、それを私たちに下さるだろう。あの地には、乳と蜜が流れている。ただ、主にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし主が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」(民数記14章7～9節)

これを聞いたイスラエルの民たちはヨシュアとカレブを石で打ち殺そうと言います。幸いにしてモーセのとりなしによりヨシュアは助かりはします。しかし、イスラエルは約束の地を目の前にして主に逆らったことにより、四十年間荒野をさまようことになったのです。

## 2 強くあれ、雄々しくあれ

### (1) 主がともにおられる

今再びイスラエルの民はカナンを目の前にしています。四十年前、ヨシュアは自分の同胞に殺されそうになりながらも自分の考えを曲げようとはしません。自分を殺そうといきり立っているいる人々の前で頭を下げ、一生懸命説得します。

そのヨシュアは今どうなのでしょう。今日の箇所を読むと、何度も主が「強くあれ。雄々

しくあれ」と励ましていることに気がつきません。なんだか四十年前のヨシュアとは違って、自信を失いかけているように感じます。考えてみれば無理ありません。モーセを失い、自分はリーダーになったばかり。それだけでも大変だということに、約束の地カナンに入るかどうかが決断を迫られています。もしここで判断を誤るならば、多くの人々がいのちを失うことになりかねません。リーダーとしての責任の重大さがひしひしとヨシュアの肩に押しかかってくる。よりによってなぜこんなタイミングなのか。とまどいます。四十年前、自分が人々から殺されそうになったことを思い出してしまいます。

主はそんなヨシュアの不安と恐れを知ってくださり、励まします。「わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」「あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」

皆さんの中にもこのみことばで励まされた方がいると思います。有名なみことばと言ってもいいでしょう。

さて、何度も聞いて有名な箇所だからこそ、少し立ち止まって考えたいのです。主はヨシュアに「あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである」と言われました。では、いったいどこまでのことなのでしょう。ヨシュアが向かおうとしている約束の地を指すことは間違いありません。地上の生涯、いつも主がヨシュアとおられた。そのように言うことはできます。しかし、それで終わりなのでしょうか。ヨシュアが死んだら主はどうされるのでしょうか。死んだらおしまいですか。主のみことばは深く重いのです。主は

軽々しい約束などされません。「主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにある」と言われたのなら、それは徹底的なのです。地上のいのちが尽きたので、そこでこの約束は終わりではない。ヨシュアが死んでも、約束は続くはずではないですか。

(2) モーセと約束した、先祖たちに誓った意外に思いましたか。では、主がこう語っているのはどういうことですか。3節。「あなたがたが足の裏で踏む所はことごとく、わたしがモーセに約束したとおり、あなたがたに与えている。」

これと関連するのが6節後半。「わたしが彼らに与えるとその先祖たちに誓った地を、あなたは、この民に継がせなければならない。」約束した相手が死んでしまえば、約束は破棄される。それがこの世の常識です。モーセは死んでしまったのですから、かつての約束はなかったことになるはず。先祖はとうの昔に死んでいます。そんな昔の約束のことなどなかったことにしておしまい。ところが神はどうされるでしょう。モーセが死んでも、先祖が死んでも、神はかつての約束を守ろうとされるのです。なかったことには絶対にしません。なぜでしょう。

答えは一つです。モーセは死んだのではない。先祖は死んだのではない。眠っている。やがてよみがえる。今は眠っているけれど、もう一度起こされる。そのことを主がなさるから。神の目から見ると、モーセも先祖も死んではいない。だから約束はそのまま有効なのです。

そうしますと、主が「あなたの行く所どこにでも」と言われるとき、それは私たちの地上の生涯のことだけではなく、たとえ死んだ

としてもかわらずに死の先にまでともにおられるということになります。主の励ましは、決して中途半端なものではない。どこまでも徹底的であることがこれでおわりでしょう。

### 3 栄えるためである

主がヨシュアを励まそうとされる理由は、それだけではありません。7 節。「それは、あなたが行く所はどこでも、あなたが栄えるためである。」ひとえに、神の民が栄えるためです。主はいつも私たちの幸いを願っているのです。

ここで一つ注意しなければならないことがあります。今日の箇所、「栄える」とか「繁栄」ということばが出て来ます。この文字を見て私たちは自分勝手に考えるかもしれません。

ある方はこう言うでしょう。「神は、私たちがこの社会で繁栄することを求めている。具体的には、会社を経営し、利益を得ること、地位と名誉を得ようと努力すること。それらはすべて聖書的である。」西欧の文化では、このような聖書観を土台にして経済活動がなされている指摘する人もいます。間違いとは言いません。でもそれがすべてなのでしょうか。聖書が言おうとしている本当の意味は何か。きちんと確認しなければなりません。

調べてみると、「栄える」と訳されていることばは、「賢くなる」「悟る」と訳することができることばです。もう少しわかりやすく言い直せば、主の正しい道を歩むことができたとき、私たちは本当の意味で栄え、繁栄できる。そのような意味になります。

「私のしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行え。」「この律法の書を、あ

なたの口から離さず、昼も夜もそれをくちずさまなければならぬ。」このようになんども繰り返すのは、私たちが主の道を知るためです。主の正しい道がわかるようになったとき、その先に私たちの繁栄が約束されていく。それ以外の道はあり得ないと言っているのです。

ヨシュアは、これからカナンの地に入ろうとしていきます。主がともにおられるので、何も問題が起きなかったわけではありません。様々な困難や問題に直面します。そのとき、そのとき信仰が試されていきました。そのたびにヨシュアは考えたはずです。自分は主の律法を守り行っているのかどうか。もしかして、人間の目から見るなら愚かな選択と言われることがあるかもしれない。でも、そのような非難を恐れず、ただ主の道にかなっていることを求め続ける。右にも左にもそれず、そこにとどまり続けます。

私たちはどうでしょうか。この一年、様々なことが待ち構えているでしょう。そのとき、私たちはどんな判断をするでしょうか。主の律法を思い出すでしょうか。それとも、目に見えることをすべてとするこの世の価値観に流されるでしょうか。

常に「主の律法を守り行え」と主は言われます。それはどんな意味でしょうか。律法主義者、パリサイ人のようにせよというのでしょうか。しかしイエスは彼らを強く非難したのではないですか。

それで私たちは初めてわかったのです。私たちは主の律法を守ることができない罪人である。主の正しい道を歩めない私たちは、救いが必要なのだと心から願わされていきます。

そんな私たちに主はどうして下さいます

か。律法を守り行えない者であっても、主はヨシュアに約束したとおりに、私たちの行く所どこにでも、主はともにいて下さる。地上で約束の地を見ることがなかったとしても、私たちは必ず天の御国に迎えられる。主はどこまでも私といっしょにいて下さる。そう語ってくださっています。

本当でしょうか。どのようにして確かめることができるでしょうか。十字架で死んで行かれた主を見上げてください。十字架を見上げたとき、主の約束が真実であることがわかります。私たちが死ぬ前に、まず主ご自身が先立って死んでくださいました。私たちが行くべき所に先回りしてともにいて下さろうとしています。主の救いの恵みに感謝いたします。